

憲二氏によって推定されていたが、これはその裏付けとなるであろう。

さらに、第42紙に眼をこらすと、「九」のすぐ下の位置にも墨が薄く付いている。第43紙の「九」の裏文字の一部と形がよく似ているから、第43紙の墨がまた第42紙に付着したのではなからうか。そうであるなら、第43紙は第42紙に重ねられた直後に、ずらされたということになる。この想像が当たっていれば、書き入れが綴じられていない状態でなされたことの明徴となるのではないか。ただし、そのことは、鈴鹿本が綴じられる以前の段階であったことをただちに意味するものではない。綴じ糸が切れた状態、あるいははずされた状態であったかもしれない。

このような想像を楽しむ一方で、鈴鹿本の姿の些細な箇所に着目する自分に苦笑を禁じえなかった。これは、すべてガラス越しの観察にもとづく、粗い推測にすぎないではないか。鈴鹿本を手にとって調査された方々はすでに気づいていらっしゃるであろう。いずれにしても、綴じ穴の位置、書き入れの文字の位置と形、墨の汚れの位置と形とが計測・照合されて後、確かめられるべきことである。

こうして、私は感傷と愉快的興奮を自嘲に包んで展示会場をあとにした。その感情を整理する気にはなれなかったのも、京都に行くに必ず酒を酌み交わすことにしている友人にも電話せず、大阪の宿に向かった。

(もり まさと 文学部教授 国文学)

## 熊本大学附属図書館寄託 永青文庫の貴重書 (四)

### 細川幽齋『九州道の記』一巻

荒木 尚

今年NHKの大河ドラマ「秀吉」にちなんだイベントが多かったという。そこで、今回は幽齋と秀吉との関係を追いながら資料をたどることにしたい。

天正13年(1585)4月、幽齋は秀吉から在洛料として、かつての所領地であった西岡勝竜寺一帯に三千石を与えられた。この13年ごろには、幽齋は秀吉の動向にあわせて行動することが多く(『兼見卿記』)、二人の間に親密な関係があったらしいことが知られる。秀吉は天正13年7月関白職につく頃から、文化に対する関心が強まったようである。14年には2月に、15年の末から翌16年にかけては、連続して連歌会を興行し、また出席している。そしてその連歌会の連衆のなかには、いつも幽齋が加わっているのである。文化的上昇を志向する関白秀吉にとって、幽齋はきわめて有用な存在であったにちがいない。幽齋は古今伝授の相伝者として当代歌壇の第一人者であり、その文事は文学領域のすべてに及んでいたから、そのような幽齋を側近く伺候させることによって、秀吉自身の文化的権威づけと満足感を充足させることになったと思われるからである。

天正15年の3月、秀吉は島津氏・大友氏の抗争をとどめるべく九州へ遠征した。幽齋の嫡男忠興ただおきも従ったが、幽齋は無為の丹後在国を憚って、秀吉の出陣から1月余り遅れて海路出発した。その時の細川幽齋の紀行文が『九州道の記』であり、その善本(卷子本1

巻)が永青文庫に所蔵されている。法体ほつたいになった幽齋は、戦力として合戦に参加するわけでもなく、秀吉の陣中見舞くらしいの悠長な下向であった。途中、名所旧跡に親しみ、俳諧即興の和歌・連歌を詠み、秀吉と同席しては風流韻事を楽しむ雰囲気めいひのたまが記されている。天正15年6月の記事を引いてみよう。→[ I ]

8日、陣中に供奉して福岡の姪浜めいのはまにいた千利休(1522~91)の宿所に秀吉がやってきて、連歌一折を所望し、幽齋が求められて発句はつくを詠んだ。発句は当座の賓客が詠むもので、季語を具え、格調のある挨拶性が要件とされる。一座における幽齋の地位のほどが知られよう。幽齋は、笹崎八幡宮はこざきの標しるしの松に秀吉(松)を寓して、和平を実現させた功績を称える挨拶の句とした。季語は「涼し」で夏。続いて脇句を「松」(秀吉の一字名)が付け、日野中納言輝資が第三句を継いでいる。秀吉の在所となった八幡宮境内では、幽齋は請われて、標の松によせた祝言の心を詠進した。戦いをやめて剣をこの武神のもとに納めなさい、箱崎の千年の松もわが君の代の友であるから、と秀吉の戦勝をことほいでいる。

次の[ II ]は、6月25日と27日の記事である。宗易(利休)からよこされた歌「あまざかる鄙ひなの…(都を離れた地方の住いと思うなかれ、どこも同じ浮世ではないか)」に返事して、幽齋は「あまざかるひなには…(都を離れた地方にはやはり居たくないよ、どこも同

じ浮世だけれども)」と応じた。幽齋が西国の生活を託つことがあったらしく、それを利休が慰めたのに対し、やはり「ゐたむなき」(居とうない)とすねていて、二人の親しさがうかがえる。27日は、草花を付けて沢山の花瓶を用意した御座敷での当座の連歌会。ここでも幽齋は秀吉から発句を所望されて、「夏草に…」と詠み、意表を衝いて夏の草花を賞でる秀吉の風雅をよるこんだ。脇句は秀吉。発句の「たもと」を受けて、衣に夜半の月を映した。そして第三句は秀吉側近の連歌作者大村田己が付けている。

幽齋は、秀吉が主催した聚楽第の歌会や花見の歌会などにはその人数に加わっていて、代詠歌を詠むことも多かったようである。幽齋はやはり、秀吉の文事には欠かせない存在であった。加えて秀吉には、幽齋の諧謔嗜好が好もしく思われていたらしい。幽齋の狂歌や雑俳は『細川幽齋詠歌聞書』に収載され、また『古今夷曲集』『後撰夷曲集』や『醒睡笑』などにも載り、その中には秀吉と俳諧を楽しんだ記事がみえる。そこで『月刈藻集』に収める話を引いてみたい。

玄旨法印語テ云、秀吉連歌ヲ好ミ給シ比、或時御前紹巴ナド有合ケルトキ、太閤ノ連歌ニイヅレノ句ニテアリケン、「宇治川ニ花舟ナガス」トアソバサレ

タリ。サテ人間給フハ、カヽル川ニモ花ハ有コトニヤト尋タマヒケルトキ、イツレモ古キ証歌モ覚ヘズ。ナントモ申ス人侍ラザリケルニ、玄旨イハレケルハ、撰集ハ覚ヘズ、証歌ハ候ト。人々ウチ案ジタリケルニ思ヒヨラズ。何ト申ス歌ゾト問ヒケルニ、

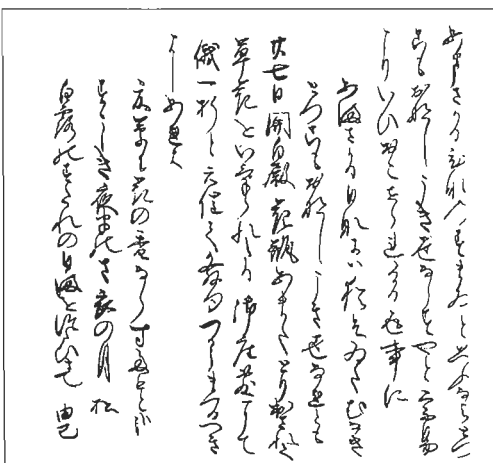
水上ハ桜谷ニヤツマクラン花舟ナガス宇治ノ川長ト云ヘル歌アリト申サレケルニ、太閤コトニ御喜悅アツテ事スミタリ。其後紹巴、玄旨ニ会セシトキ、桜谷ノ歌イロイロ考ヘ侍レド、イツレノ内ニモアラズ。若シクハ思ヒタリ給フニヤト尋タリシニ、玄旨、サレバコソ。ソレハ上ノ首尾アハスルマデニテ、即席ノ愚ナレバ何ニカハ侍ラント申サレタリケルニゾ。

(私意により改めたところがある)  
秀吉の発句には疑点があったが、幽齋が即詠でありもしない証歌を詠み出して、その場をうまく納めた。後日、紹巴が幽齋の処世に、感心することになっているが、同類の説話はほかにも多く伝えられている。連歌に限らず当時の文芸は、詩に奉仕するとともに座の人間関係にも機能していた。秀吉が文事に期待していたものを理解して、見事に対応したのが細川幽齋であった。

(あらき ひさし 文学部教授 国文学)

## 本学教官寄贈著書紹介

- |   |   |
|---|---|
| 金原 理 教授(文・比較文学)<br>平安朝漢詩文の研究<br>金原 理著<br>九州大学出版会 1981.10  | 宮本光雄 教授(教・社会科教育)<br>生活科の理論と実践<br>授業づくりから<br>評価活動まで<br>宮本光雄編著<br>東洋館出版社 1991.9 |
| 上利政彦 教授(文・英語学)<br>Formula, Rhetoric<br>and the Word<br>Studies in Milton's Epic<br>Style by Masahiko Agari<br>PETER LANG 1996 | 社会科の基礎・基本と<br>意欲的な追究活動<br>宮本光雄編著<br>東洋館出版社 1992.4                             |
| 坂田正治 教授(文・独文学)<br>クロプシュトックの抒情詩研究<br>坂田正治著<br>近代文芸社 1996.7   | 生活科と社会科の接続・発展<br>その理論と実際<br>宮本光雄編著<br>東洋館出版社 1996.12                          |
| 松本寿三郎 教授(文・国史学)<br>熊本藩侍帳集成<br>松本寿三郎編<br>細川藩政史研究会 1996.5   | 首藤基澄教授(養・文学)<br>句集 火志<br>平成俳句叢書Ⅲ<br>未来図叢書第六六篇<br>首藤基澄著<br>東京四季出版 1996.6       |
| 中本 環 教授(教・国文学)<br>日本古典文学に<br>おける愛のかたち<br>中本 環著<br>KTC中央出版 1994.10   | 福永武彦・魂の音楽<br>首藤基澄著<br>おうふう 1996.10  |



あまざかるひなのすまると思ふなよどつこもおなじうき世ならずや、と宗易よりいひおこせられける返事に、あまざかるひなには猶ぞゐたむなきとつこもおなじうき世なれども廿七日、関白殿花瓶あまたとり出されて草花をいけられたる御座敷にて、俄一折と被催で、発句つかうまつるべきよしあれば、夏草に花の香ならすたと哉すゞしき夜半のさ衣の月白露のすだれのひまをつたひきて 由己

[ II ] 『九州道の記』天正15年6月26日・27日の条。

# 東光原

熊本大学附属図書館報

Kumamoto University Library Bulletin, No.16. February. 1997

- 鈴鹿本「今昔物語集」一見の記  
熊本大学附属図書館寄託永青文庫の貴重書(四)
- 細川幽斎『九州道の記』一巻
- コーディングマニュアル試作に携わって  
—総合目録データベース実務研修報告—
- 平成8年度漢籍整理長期研修報告
- 今世紀最後の図書館システム

同日利休居士へ関白殿後御ありて  
しばし御物語有て後、一折と被相儘で  
発句つかまつるべきよしあれば、宮崎八  
幡のころを  
神代にもこえつ、涼し松の風  
雲間に遠き夏の夜の月 松  
ほのかにも明行空の雨晴て 日野新中納言  
箱崎の八幡の内、関白殿おまし所に  
なりて、各参上せしに、しるしまつに  
よせて祝言の心をよませられるに、  
つるぎをばこ、におさめよ箱崎の  
松の干とせも君が代の友  
関白殿、はごさきの松原にてすままるへ  
きよし有て、各めしくせられ、しばし御遊興の  
事あり。おほみきまいり誰どもありて

同日利休居士へ関白殿後御ありて  
しばし御物語有て後、一折と被相儘で  
発句つかまつるべきよしあれば、宮崎八  
幡のころを  
神代にもこえつ、涼し松の風  
雲間に遠き夏の夜の月 松  
ほのかにも明行空の雨晴て 日野新中納言  
箱崎の八幡の内、関白殿おまし所に  
なりて、各参上せしに、しるしまつに  
よせて祝言の心をよませられるに、  
つるぎをばこ、におさめよ箱崎の  
松の干とせも君が代の友  
関白殿、はごさきの松原にてすままるへ  
きよし有て、各めしくせられ、しばし御遊興の  
事あり。おほみきまいり誰どもありて

[ I ] 『九州道の記』天正15年6月8日の条。室町後期写。卷子本一巻。  
外題・内題ともにないが、箱書に「幽斎公道記」とある。東京都・細川家永青文庫蔵。